

# 大学生の不登校傾向と対人恐怖心性との関連

## Relationship between Tendency toward Non-attendance and Anthropophobic Tendency in University Students

堀井 俊章 (Toshiaki HORII)

### I 問題と目的

世間一般では、「不登校」という言葉を耳にすると、小学生・中学生の問題として思い浮かべる者が少なくないと思われる。しかし今日、大学生においても不登校の問題が注目されている。事実、全国規模の調査（水田他，2009，2010）では、不登校の大学生数が0.7～2.9%（全国の大学生約280万人中2.0～8.1万人）と推定され、看過できないデータが示されている。不登校の大学生がこれほどまでに多いのであれば、不登校傾向の大学生、例えば、授業を欠席しがちな学生や大学に行きたくないと思っている学生の人数が相当数に上るという実態（堀井，2006a）も容易に想像がつく。

このような不登校傾向には肯定的な意味を見出すことも可能であると思われるが、現実的には不登校、ひきこもり、留年、中退等に結びつくおそれがあり、それが本人にとって不本意なものであるならば、予防という観点からも不登校傾向の大学生を理解し、必要に応じて援助することが大切である。そのためにまずは不登校傾向の要因について検討する必要がある。不登校の要因としては従来、諸説論じられてきた（堀井，2013a）。とりわけ不登校大学生のタイプ分類を試みた小柳（1996）は、「対人恐怖を伴うもの」というタイプを挙げ、高塚（2000）も「対人恐怖型」という不登校の一類型を挙げている。これらの知見から対人恐怖は不登校と密接な関連にあることがうかがわれる。

また筆者は、自らの学生相談経験に基づくと、対人恐怖心性（堀井，2006b）が不登校傾向に一定の影響を与えているという仮説をもっている。学生相談場面では、周りの人を必要以上に怖がりおびえる者、他人から批判されることをひどく恐れている者、自分の攻撃性をコントロールできずに周りに迷惑をかけていると感じている者、自分の容姿や目つきの悪さを過度に気にしている者、人に攻撃されたり裏切られたりすることを恐れて、人と親密な関係を築けないでいる者など、おびえの心性に基づく対人恐怖的な問題を自覚し、それゆえに不登校傾向となっている大学生としばしば遭遇する。

このように対人恐怖的な問題、すなわち対人恐怖心性が不登校傾向に影響を与えていることが予測されるのであるが、不登校傾向は「授業を欠席しがちである」といった訴えに代表される登校回避行動と、「大学に行きたくない」といった訴えに代表される登校回避感情に大きく二分される。学生相談場面では、対人恐怖心性が強まり、そこから直接登校回避行動に移行していると思われるケースもあれば、対人恐怖心性が強まり、いったん登校回避感情が喚起されてから登校回避行動に移行していると思われるケースも存在する。すなわち、対人恐怖心性が登校回避行動に影響を与える経路については、対人恐怖心性が登校回避行動に直接的に影響を与える経路と、対人恐怖心性が登校回避感情を介して登校回避行動に間接的に影響を与える経路が想定されるのである。

これらの学生相談経験から得た臨床的知見（仮説）を実証的観点から見直すためにも、おびえの心性に基づく対人恐怖心性が不登校傾向に影響を与えているか数量的に検討する必要がある。

また、不登校傾向には学年差があることが判明している（堀井，2013b）。そして、対人恐怖心性は恥の心性に基づく対人恐怖心性とおびえの心性に基づく対人恐怖心性の二つに大きく分類されるのであるが、恥の心性に基づく対人恐怖心性についても学年差が見出されている（堀井，2012）。しかし、おびえの心性に基づく対人恐怖心性の学年差については、未だ検討されていない。おびえの心性に基づく対人恐怖心性

性についても不登校傾向や恥の心性に基づく対人恐怖心性と同様に学年差が生じている可能性がある。

したがって、本研究では、まずはおびえの心性に基づく対人恐怖心性の学年差（性差も含む）について検討し、その上で、おびえの心性に基づく対人恐怖心性と不登校傾向との関連について検討することを目的とする。

## II 方法

### 1. 調査対象

調査対象は4年制のA大学の学生4,461人（平均年齢19.62歳、 $SD1.32$ ）、内訳は男子2,896人、女子1,565人、1年生1,408人、2年生931人、3年生909人、4年生1,213人であった。

### 2. 質問紙の構成

#### (1) 大学生不登校傾向尺度

堀井（2013b）が作成した心理測定尺度であり、大学生の不登校傾向、すなわち「大学の正課活動に対する回避傾向」が測定され、二つの下位尺度（各6項目全12項目7件法）から構成されている（表1）。教示文は「あなたの大学生活の様子や気持ちについてお尋ねします。次のことがらが自分に「あてはまる」か「あてはまらない」か、その程度を○で囲んで下さい」とした。各項目に対する回答は、「非常にあてはまる（6点）」「あてはまる（5点）」「ややあてはまる（4点）」「どちらともいえない（3点）」「ややあてはまらない（2点）」「あてはまらない（1点）」「全然あてはまらない（0点）」の7件法で求めた。得点が高いほど各項目の意味する不登校傾向が高いことを表す（逆転項目を除く）。下位尺度の概要は以下の通りである。

表1 大学生不登校傾向尺度の項目

尺度1：登校回避行動	
1	欠席しがちな授業がある
2	なんとなく大学に行かないことがある
3	大学を休みがちである
4	授業を遅刻しがちである
5	大学に行きたいけれどもなぜか行けないことがある
6	一日の授業がすべて終わる前に帰宅することがある
尺度2：登校回避感情	
1	日曜日の夜、明日 大学に行きたくないと思うことがある
2	朝、今日は大学に行きたくないと思うことがある
3	大学をしばらく休みたいと思うことがある
4	一日の授業がすべて終わる前に帰宅したくなることがある
5	大学に行くのは楽しい（注：逆転項目）
6	参加したくない授業がある

#### 1) 登校回避行動

「欠席しがちな授業がある」「なんとなく大学に行かないことがある」などの項目から構成され、大学への登校を回避する行動的側面を表す。

#### 2) 登校回避感情

「日曜日の夜、明日 大学に行きたくないと思うことがある」「朝、今日は大学に行きたくないと思うことがある」などの項目から構成され、大学への登校を回避する感情的側面を表す。

## (2) 対人恐怖心性尺度Ⅱ

堀井（2006b）が作成した心理測定尺度であり、おびえの心性に基づく現代的な対人恐怖心性が測定され、5つの下位尺度（各5項目全25項目7件法）から構成されている（表2）。教示文は「ここにはさまざまな悩みや不満が書かれています。ここに書かれていることがらをよく読んで、それが自分に「あてはまる」か「あてはまらない」か、その程度を○で囲んで下さい」とした。各項目に対する回答は、「非常にあてはまる（6点）」「あてはまる（5点）」「ややあてはまる（4点）」「どちらともいえない（3点）」「ややあてはまらない（2点）」「あてはまらない（1点）」「全然あてはまらない（0点）」の7件法で求めた。得点が高いほど各項目の意味する対人恐怖心性が高いことを表す。下位尺度の概要は以下の通りである。

表2 対人恐怖心性尺度Ⅱの項目

尺度1：劣等恐怖	
1	周りに自分より実力のある人がいて不安である
2	他人が自分より優れていると不安になる
3	自分の考えが周りと同じかどうか気になる
4	人から批判されることをひどく気にしている
5	周りができることを自分一人だけでできなくて不安に思うことがある
尺度2：被害恐怖	
1	周囲に感情むきだしの人がいて怖い
2	知り合いに怒りっぽい人がいて怖い
3	周りには何を考えているかわからない人がいて怖い
4	周りに自分の気持ちを傷つける人がいて怖い
5	自分のことを決めつける人がいて怖い
尺度3：自己視線・醜形恐怖	
1	自分の目つきは悪い
2	自分の目つきが周りの人を不快にしているのではないかと思う
3	人と会っていると目つきがきつくなる
4	自分の容姿がよくないために周囲の人に嫌な思いをさせている
5	自分の外見は変だと思う
尺度4：孤立・親密恐怖	
1	裏切られると思って人と深くかかわらないようにしている
2	人と親密な関係になることは怖い
3	周りに頼れる人はほとんどいない
4	自分は周囲に理解されない人間である
5	誰も自分のことを心配してくれないと感じる
尺度5：加害恐怖	
1	人を精神的に追いつめてしまうことがある
2	思ったことをすぐに相手に言ってしまい相手を傷つけてしまう
3	いつか人を傷つけてしまうのではないかと思う
4	自分は他人に残酷な人間である
5	自分の本音を話すと相手を傷つけてしまう気がする

## 1) 劣等恐怖

「周りに自分より実力のある人がいて不安である」などの項目から構成され、自分より優れた他者の存在におびえ、自分が他者より劣ることにおびえた状態を表す。

## 2) 被害恐怖

「周りに自分の気持ちを傷つける人がいて怖い」などの項目から構成され、自分に攻撃性を向ける、またはその危険性のある他者の存在におびえた状態を表す。

### 3) 自己視線・醜形恐怖

「自分の目つきが周りの人を不快にしているのではないかと思う」などの項目から構成され、自分の視線や容姿にコンプレックスをもち、他者を不快にさせていることにおびえた状態を表す。

### 4) 孤立・親密恐怖

「人と親密な関係になることは怖い」などの項目から構成され、他者との親密な関係をもつことにおびえ、孤立感を深めた状態を表す。

### 5) 加害恐怖

「いつか人を傷つけてしまうのではないかと思う」などの項目から構成され、自分が他者に攻撃性を向けて精神的なダメージを与えてしまうことにおびえた状態を表す。

## 3. 分析

各尺度の信頼性について検討した後、対人恐怖心性の発達差と性差を検討するために2要因（性×学年）の分散分析を行った。次に不登校傾向と対人恐怖心性との関連を検討するために、対人恐怖心性が登校回避行動に直接的に影響を与える経路と、対人恐怖心性が登校回避感情を介して登校回避行動に間接的に影響を与える経路を想定した仮説モデルについて共分散構造分析によるパス解析を行った。

## Ⅲ 結果

### 1. 対人恐怖心性尺度Ⅱの信頼性

対人恐怖心性尺度Ⅱについて、因子分析（主因子法）によって尺度の開発時と同一の因子が抽出されたことを確認した上で、下位尺度の内的整合性を確認するために Cronbach の  $\alpha$  係数を算出した。その結果、劣等恐怖は .85、被害恐怖は .88、自己視線・醜形恐怖は .86、孤立・親密恐怖は .85、加害恐怖は .83 であった。これらの結果より、対人恐怖心性尺度Ⅱの高い内的整合性が確認された。なお、5つの下位尺度得点を用いて因子分析（主因子法）を行った結果、1因子が抽出された（因子負荷量は孤立・親密恐怖が .85、自己視線・醜形恐怖が .82、被害恐怖が .79、加害恐怖が .79、劣等恐怖が .65 であり、1因子の寄与率は 68.6%であった）。この1因子は対人恐怖心性と命名された。

### 2. 対人恐怖心性の学年差と性差

対人恐怖心性尺度Ⅱの下位尺度得点および1因子としての対人恐怖心性の因子得点の平均値について、性別・学年別に算出しプロットしたものを図1に示した。また、2要因（性×学年）の分散分析を行った結果を表3に示した。なお、交互作用が認められた場合、単純主効果の検定を行った。また、有意な学年差が認められた場合、Tukey 法による多重比較を行った。

表3を見てわかるように、学年差については、劣等恐怖では3年生から4年生にかけて有意に低下していた。被害恐怖では、女子において1年生から2年生にかけて有意に上昇し、3年生から4年生にかけて有意に低下していた。自己視線・醜形恐怖では、1年生から2年生、2年生から3年生、そして3年生から4年生にかけて有意に低下していた。孤立・親密恐怖と加害恐怖では、3年生から4年生にかけて有意に低下していた。また、1因子としての対人恐怖心性では、3年生から4年生にかけて有意に低下していた。性差については、劣等恐怖では女子が男子より高く、被害恐怖では2年生と3年生において女子が男子より高く、自己視線・醜形恐怖では男子が女子より高いという結果が認められた。

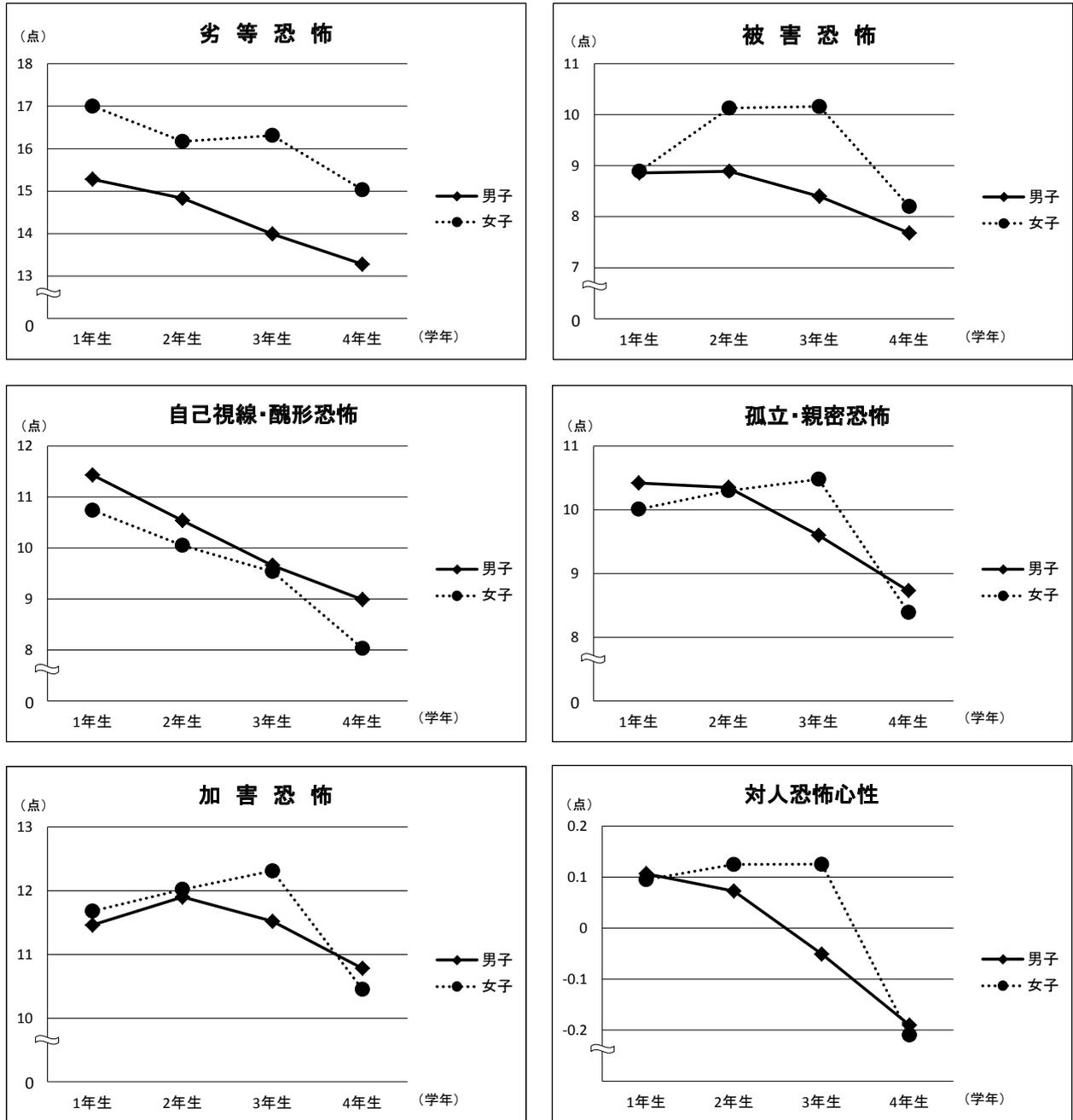


図1 対人恐怖心性尺度Ⅱの学年別得点の推移

表3 対人恐怖心性尺度Ⅱの二要因(性×学年)分散分析の結果

	1年生	2年生	3年生	4年生	F	性差	F	学年差	交互作用
	M(SD)	M(SD)	M(SD)	M(SD)					
劣等恐怖	15.28(6.86)	14.83(6.68)	13.99(7.09)	13.28(6.94)	69.30***	男<女	17.83***	3>4	0.79
被害恐怖	8.86(5.82)	8.89(5.68)	8.40(6.02)	7.68(5.69)	1年: 0.01 3年: 19.13***	2年: 9.55**男<女 4年: 2.22	男 7.36*** 女 10.28***	1<2 3>4	4.42**
自己視線・醜形恐怖	11.43(6.16)	10.54(5.84)	9.66(5.88)	8.99(5.68)	9.27**	男>女	41.16***	1>2 3>4	0.89
孤立・親密恐怖	10.42(6.15)	10.35(6.05)	9.60(6.01)	8.73(5.90)	0.01		20.13***	3>4	2.25
加害恐怖	11.46(6.19)	11.90(6.09)	11.52(6.26)	10.78(6.18)	1.05		10.40***	3>4	1.35
対人恐怖心性	0.11(0.97)	0.07(0.93)	-0.05(0.97)	-0.19(0.93)	2.71		25.07***	3>4	2.17

\*\*p<.01, \*\*\*p<.001  
 各得点のM(SD)は上段が男子, 下段が女子  
 学年差の多重比較の結果は隣接学年間のみ掲載  
 交互作用が有意な場合は単純主効果の検定結果を掲載

### 3. 大学生不登校傾向尺度の信頼性

大学生不登校傾向尺度について、因子分析（主因子法）によって尺度の開発時と同一の因子が抽出されたことを確認した上で、下位尺度の内的整合性を確認するために Cronbach の  $\alpha$  係数を算出した結果、登校回避行動は .86、登校回避感情は .82 であり、大学生不登校傾向尺度の高い内的整合性が確認された。

### 4. 不登校傾向と対人恐怖心性との関連

対人恐怖心性が登校回避行動に直接的に影響を与える経路と、対人恐怖心性が登校回避感情を介して登校回避行動に間接的に影響を与える経路を想定した仮説モデルについて共分散構造分析によるパス解析を行い検証した。分析対象者全体による結果を図 2 に示した。これを見てわかるように、対人恐怖心性は登校回避行動に有意な正の影響 ( $\beta=.13, p<.001$ ) を与えていた。また、対人恐怖心性は登校回避感情に有意な正の影響 ( $\beta=.43, p<.001$ ) を与え、登校回避感情は登校回避行動に有意な正の影響 ( $\beta=.40, p<.001$ ) を与えていた。

対人恐怖心性が登校回避行動に直接的に与える影響の大きさは .13 であり、対人恐怖心性が登校回避感情を介して登校回避行動に間接的に与える影響の大きさは .17 ( $.43 \times .40$ ) であった。なお、劣等恐怖、被害恐怖、自己視線・醜形恐怖、孤立・親密恐怖、加害恐怖のそれぞれは、潜在変数である対人恐怖心性から有意な正の影響を受けていることが確認された。また、モデルの適合度については GFI=.979、AGFI=.959、CFI=.975、RMSEA=.077 であり、許容範囲内であると判断された。

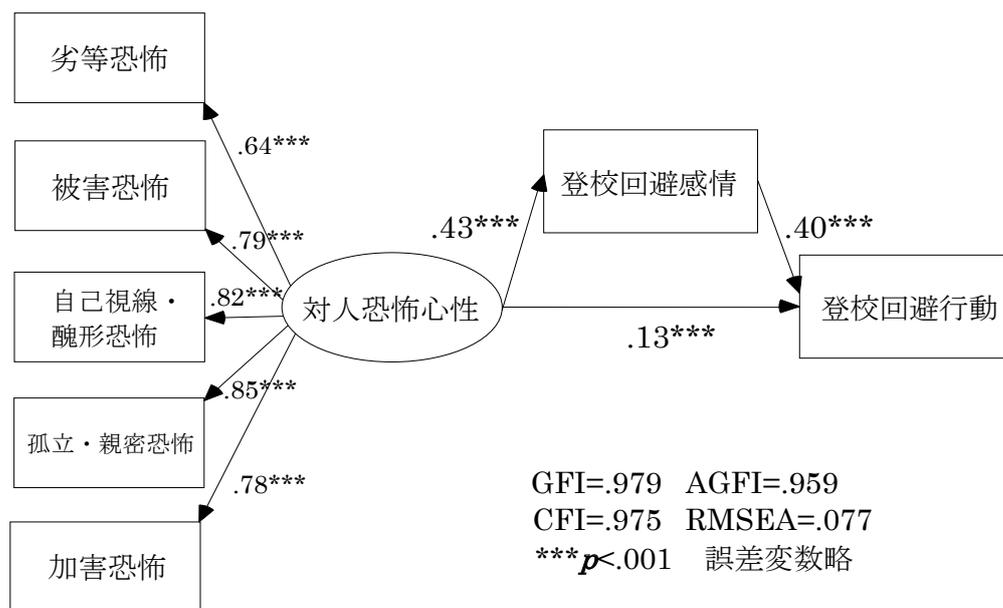


図 2 不登校傾向と対人恐怖心性との関連モデル

次に不登校傾向と対人恐怖心性との関連について学年差の検討を行うために多母集団同時分析を行った。主な結果として、対人恐怖心性が登校回避行動に与える影響性（パス係数）は 1 年生が  $\beta=.29$  ( $p<.001$ )、2 年生が  $\beta=.20$  ( $p<.001$ )、3 年生が  $\beta=.10$  ( $p<.01$ )、4 年生が  $\beta=.05$  (n.s.) であった。隣接学年間において影響性の大きさを比較した結果、1 年生と 2 年生では差がなく、2 年生より 3 年生が小さく、3 年生と 4 年生では差がなかった（パス係数の学年間の差はいずれも  $p<.05$ ）。

対人恐怖心性が登校回避感情に与える影響性は 1 年生が  $\beta=.48$  ( $p<.001$ )、2 年生が  $\beta=.39$  ( $p<.001$ )、3 年生が  $\beta=.48$  ( $p<.001$ )、4 年生が  $\beta=.43$  ( $p<.001$ ) であった。隣接学年間の比較では、1 年生より 2 年生が小さく ( $p<.05$ )、2 年生以降は変化がなかった。

登校回避感情が登校回避行動に与える影響性は 1 年生が  $\beta=.28$  ( $p<.001$ )、2 年生が  $\beta=.26$  ( $p<.001$ )、

3年生が  $\beta=.40$  ( $p<.001$ )、4年生が  $\beta=.55$  ( $p<.001$ ) であった。隣接学年間の比較では、1年生と2年生では差がなく、2年生以降は大きくなった ( $p<.05$ )。なお、不登校傾向と対人恐怖心性との関連について性差の検討を行うため多母集団同時分析を行ったが、性差はほとんど認められなかった。

対人恐怖心性が登校回避行動に直接的に与える影響の大きさについては、1年生が .29、2年生が .20、3年生が .10、4年生が .05 であり、対人恐怖心性が登校回避感情を介して登校回避行動に間接的に与える影響の大きさは1年生が .13 ( $.48 \times .28$ )、2年生が .10 ( $.39 \times .26$ )、3年生が .19 ( $.48 \times .40$ )、4年生が .24 ( $.43 \times .55$ ) であった。

## IV 考察

本研究では、大学生におけるおびえの心性に基づく対人恐怖心性の学年差と性差について分析し、次に、おびえの心性に基づく対人恐怖心性と不登校傾向との関連について分析を行った。ここでは結果について考察しながら、学生支援上の課題について検討する。

### 1. 対人恐怖心性の学年差と性差

堀井 (2012) によると、恥の心性に基づく対人恐怖心性 (対人不安意識) は、総じて1年生から2年生にかけて低下し、2年生から3年生にかけては変化がなく、3年生から4年生にかけて低下するという結果が見出されている。本研究においても、1年生から2年生にかけては自己視線・醜形恐怖が低下し、2年生から3年生にかけては自己視線・醜形恐怖以外は変化がなく、3年生から4年生にかけては、男子の被害恐怖を除くすべての下位尺度および1因子としての対人恐怖心性において低下していた。すなわち、恥の心性に基づく対人恐怖心性とおびえの心性に基づく対人恐怖心性は、部分的には同様の学年差の傾向を示したことになる。

しかし、おびえの心性に基づく対人恐怖心性では、自己視線・醜形恐怖を除くすべての下位尺度および1因子としての対人恐怖心性について、1年生から2年生にかけて有意な変化が見られなかった。つまり、全体的に見ると1年生から2年生にかけて低下していないことが示唆される。女子の被害恐怖にいたってはむしろ上昇するという結果が得られている。このことはおびえの心性に基づく対人恐怖心性の特徴を表していると考えられる。恥の心性に基づく対人恐怖心性の場合、1年生が他の学年と比べて総じて高く、新入生の不登校、ひきこもり、中退などを予防するためにも、入学期の初期適応を支援するための方策 (学生相談・支援体制、教育プログラム、環境設備面等) の強化を図る必要性が提唱された (堀井, 2012)。しかし、おびえの心性に基づく対人恐怖心性は、総じて1年生から3年生にかけて維持または上昇していた。このような結果を踏まえると、対人恐怖心性の緩和や予防をねらいとした支援は1年生だけに集中するのではなく、広く2年生や3年生も対象に含め、積極的に支援に取り組む必要があると考えられる。

また、性差の観点からは、自己視線・醜形恐怖について男子が女子よりも高いという結果が得られた。対人恐怖のさまざまな症状の中でも自己視線恐怖や醜形恐怖の兆しは、その後重篤例として発症する場合もある。目つきや容貌を過度に気にする男子学生はそのような不安によって生活に支障を来していないか注意を払う必要がある。また、全学年において女子の劣等恐怖が高く、被害恐怖については2、3年生において女子が高いという結果が得られた。学生相談経験を踏まえると、男子の場合、対人場面での恐怖感情が高まった場合に、その対人場面から回避するという手段を選択しやすい (そのために孤立感もちやすい) のに対し、女子は回避することなく無理して対人場面にとどまろうとし、それゆえに対人場面の中での劣等恐怖や被害恐怖を感じやすい。女子学生への支援としては、実際の対人場面の中で、人とかわりながらいかに恐怖感情を緩和していくか、もしくは時には対人場面から適切に回避するための方策や意味について、面接の中で取り扱ってゆくことが重要であると考えられる。

## 2. 不登校傾向と対人恐怖心性との関連

対人恐怖心性が登校回避行動に直接的に影響を与える経路と、対人恐怖心性が登校回避感情を介して登校回避行動に間接的に影響を与える経路を想定した仮説モデルについて検証した結果、モデルは概ね妥当であったと評価される。つまり、対人恐怖心性は直接的に、または間接的に登校回避行動に影響を与えることが示唆され、臨床的知見（仮説）は概ね実証されたと考えられる。

分析対象者全体の結果について、対人恐怖心性が登校回避行動に影響を与える経路を見ると、対人恐怖心性が登校回避行動に直接的に与える影響の大きさよりも対人恐怖心性が登校回避感情を介して登校回避行動に間接的に与える影響の大きさのほうが若干高いという結果が得られた。対人恐怖心性の強い学生の場合、そのまま直接登校回避行動に至るケースもありうるが、まずは登校回避感情が喚起され、そこから登校回避行動に移っていく可能性のほうが高いことが予測される。

学年別の結果を見ると、対人恐怖心性が登校回避行動に直接的に与える影響性は、1、2年生のほうが3、4年生よりも大きい傾向が認められた。すなわち、低学年は高学年よりも対人恐怖心性が強くなると登校回避行動に直結しやすいことが示唆される。その一方で、対人恐怖心性が登校回避感情を介して登校回避行動に間接的に与える影響性については、1、2年生よりも3、4年生のほうが大きいという結果が得られた。しかも、登校回避感情が登校回避行動に与える影響性も、1、2年生よりも3、4年生のほうが大きかった。すなわち、高学年の場合、対人恐怖心性が強くなり、登校回避感情が喚起されると、登校回避行動をより一層引き起こしやすくなると考えられる。

したがって、不登校の予防という観点からは、低学年の場合、対人恐怖心性の強さが登校回避行動に直結しやすいという点を踏まえ、対人恐怖心性の強い学生との面接において登校をめぐる行動的側面を注視する必要がある。一方、高学年の場合、対人恐怖心性の強い学生に対しては、登校回避感情が登校回避行動に影響を与えやすいという点を鑑み、面接の中で、登校をめぐる感情的側面を取り上げ検討してゆくことが重要であると考えられる。

以上のように、対人恐怖心性が登校回避行動に与える影響の経路は低学年と高学年では差異が見られた。しかし、いずれの経路を辿っても対人恐怖心性が直接的または間接的に登校回避行動に影響を与えていたことになる。また、先述したように、対人恐怖心性の学年差の分析結果によると、対人恐怖心性は総じて1年生から3年生にかけて維持または上昇していた。これらの結果を踏まえると、不登校傾向の低減や予防のためには、低学年においても高学年においても対人恐怖心性の緩和を図ることを重視する必要があると考えられる。

〈付記〉 本研究は平成19年度科学研究費（若手研究(B): 課題番号18730432）の助成を受けた。

## 文献

- 堀井俊章 2006a 大学生における不登校傾向の実態調査. 山形大学保健管理センター紀要, **5**, 62-67.
- 堀井俊章 2006b 対人恐怖心性尺度Ⅱの開発—対人関係におけるおびえの心性を測定する試み. 学生相談研究, **26**, 221-232.
- 堀井俊章 2012 大学生における古典的対人恐怖心性の発達的变化. 横浜国立大学教育人間科学部紀要Ⅰ(教育科学), **14**, 63-70.
- 堀井俊章 2013a 大学生の不登校に関する研究の動向. 横浜国立大学教育人間科学部紀要Ⅰ(教育科学), **15**, 75-84.
- 堀井俊章 2013b 大学生不登校傾向尺度の開発. 学生相談研究, **33**, 246-258.
- 水田一郎・小林哲郎・石谷真一・安住伸子・井出草平・谷口由利子 2009 大学生に見出されるひきこもりの精神医学的な実態把握と援助に関する研究. 厚生労働科学研究費補助金こころの健康科学研究事業

- 思春期のひきこもりをもたらす精神科疾患の実態把握と精神医学的治療・援助システムの構築に関する研究 平成 20 年度 総括・分担研究報告書, 79-101.
- 水田一郎・小林哲郎・石谷真一・安住伸子・井出草平・谷口由利子・草野智洋 2010 大学生に見出される不登校・ひきこもりの実態把握と支援に関する研究. 厚生労働科学研究費補助金こころの健康科学研究事業—思春期のひきこもりをもたらす精神科疾患の実態把握と精神医学的治療・援助システムの構築に関する研究 平成 19～21 年度 総合研究報告書, 53-55.
- 小柳晴生 1996 大学生の不登校—生き方の変更の場として大学を利用する学生たち. こころの科学, **69**, 33-38.
- 高塚雄介 2000 大学生の不登校の心理的要因についての考察. 第 21 回全国大学メンタルヘルス研究会 報告書, 74-75.